

ドゥーラ

産む女性とその家族を支える社会を目指して



1. ドゥーラが必要になった社会背景 ・ドゥーラサポートの要素

東京大学医学系研究科 助教

福澤(岸)利江子

2014.11.3

知っていただきたいこと

日本の特徴

- 安全にお産ができる国。
- 他の仕事と同様、産科医・助産師などの専門家は、まじめで熱心、善意。すごく貴重なこと。
- 社会の人々も几帳面でまじめ。
- 「自然は大事」という価値観を社会全体が共有している。

考えていただきたいこと

一方で…

- ビジネス化(経済第一)
- 女性のリーダーの不足(男性目線)
- 専門家・テクノロジー依存(おまかせ)
- **心のケアが未発達(担当者次第)**
- 自己防衛的なサービス(訴訟対策)
- 情報の偏り(提供者による情報の選別)

世界の問題。妊娠・出産・育児も例外ではありません。

私たちケア提供者も頑張りますが、大きな問題。産む女性も一緒に立ち向かってほしい。妊娠・出産・育児の体験自体は本来多様なものだが、一生に数度の大事なことなので、本人が心から納得のいく経験であってほしいから。

そのための切り口の一つとして



ドゥーラ

women's servant

(他の女性を助ける経験ある女性)

もとは古いギリシア語

ドゥーラが必要となった社会背景

古来～

妊娠・出産・育児において、女性は自分の生活の場で自然に助け合ってきた。

20世紀～

都市化・核家族化により、自分が妊娠するまで妊娠・出産・育児とは無縁の女性が増えた。

出産が医療施設でおこなわれるようになった。

現代の妊娠・出産・育児の特徴

➡ 母子の死亡率が減った。

しかし人間関係の豊かさは・・・？

- ✓ 世代間の智恵の伝承は少なくなった。
- ✓ 女性同士の助け合いは弱まった。
- ✓ 妊娠から産後まで、初対面のケア提供者が複数で入れ替わり立ち替わりかかわる。
- ✓ 訴訟の不安と多忙のため、ケア提供者は自己防衛的・最小限でマニュアル的なかかわりに。

ドゥーラサポートが必要になった背景

人間関係の希薄化

大量の情報
矛盾・混乱

妊娠・出産・育児の
体への負担大

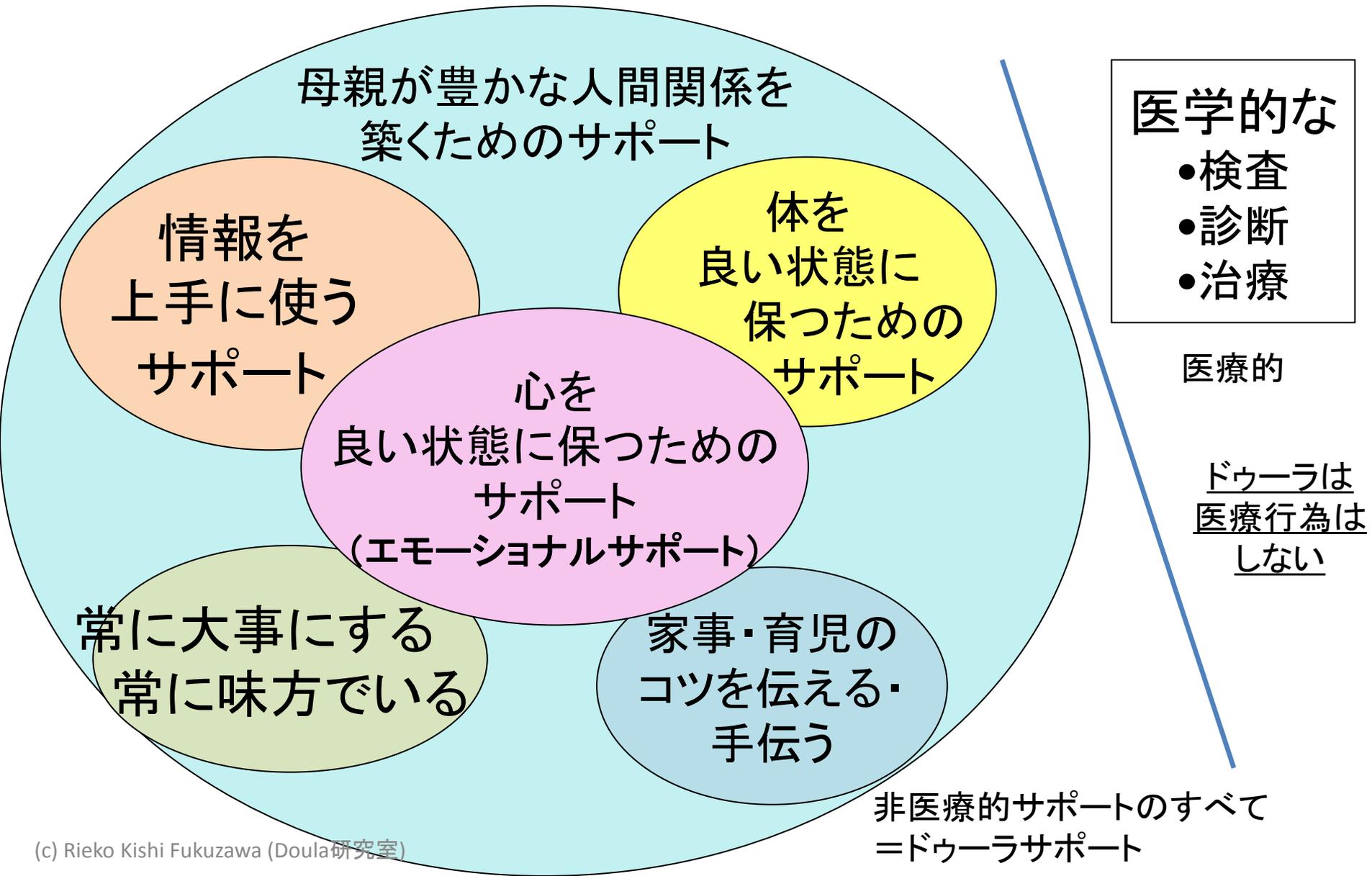
妊娠・出産・育児の
心への負担大

女性・子どもの
優先度が低い社会
訴訟増加による
専門家の自己防衛的な
態度

妊娠・出産・育児に
不慣れ
人々が忙しい

妊娠・出産は
母子の
生命にかかわる
リスクがある

ドゥーラサポートの要素





ドゥーラの広まり



ドゥーラ研究の始まり

- 1970年代、アメリカの人類学者Dana Raphaelにより母乳育児成功の鍵として、ドゥーラの概念が初めて紹介される。 (Raphael, 1973) (古今東西)
- 1980年代以降、小児科医を中心に医療の分野でドゥーラサポートについての研究が発達。安産の鍵として認められる。

職業「ドゥーラ」の発生と発達

- 1990年代以降、新たな非専門職として発達。
ドゥーラの養成・登録をおこなう組織も。

DONA International (北米)

Doula UK (イギリス)

European Doulas (ヨーロッパ)



画像 : European Doulas

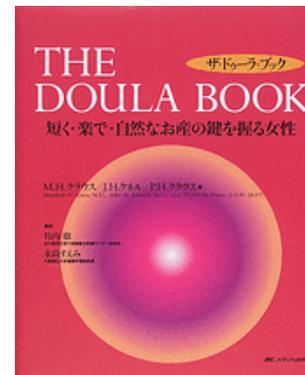
養成・登録機能だけでなく、ドゥーラのネットワーキングの場にもなっている。

中国では導楽(ドゥーラ)。

ドゥーラ in 日本

- 伝統的に産婆（助産師）がドゥーラだった。
- 近代化により開業助産師はまれになった。
- 「ドゥーラ」ということばは1977年に小児科医小林登先生が紹介。以降、小児科医竹内徹先生らによる翻訳本「ザ・ドゥーラ・ブック」など。

小林登先生



（『マザリング・ザ・マザー：ドゥーラの意義と分娩立ち会いを考える』の改訂版・メディカ出版）

日本にも「ドゥーラ」登場

2012年3月に設立。発起人は都内の開業助産師。代表・理事は若い母親のお2人。

都市部の「孤育て」に「おせっかいおばさん」を。
「出産」ドゥーラではなく「産後」ドゥーラの養成

doula

<http://www.doulajapan.com/>

近年の妊娠・出産・育児への注目

- 1.57ショック
 - 団塊ジュニア世代のベビーブームが不十分
 - 人口減少（同時に高齢化社会）
- 国力（特に経済力）低下の懸念
- 2006年「お産難民」...産科医・助産師の不足
- その後も、「産後うつ」「産後クライシス」「保育園待機児童」「イクメン」「卵子の老化」「児童虐待」など、妊娠・出産・育児をめぐる話題が多い。

「ドゥーラ」という名前だけでなくても・・・

- 「産前産後ママヘルパー」(ニチイ学館)
- 「産後ケアリスト」(日本産後ケア協会)
- 「産褥シッター」

などなど

初期には海外でも同じ傾向があった
名称は異なっても目的・アプローチは同じ
名称の違いを超えて連帯することがとても大切！



ドゥーラの役割

ドゥーラは誰に必要？

- 夫や家族との関係が安定していて、出産・育児に向けて準備をおこない、必要な時にはすぐにそばにいて助けてもらえる場合は、夫や家族がドゥーラ役割を担うことが理想的で十分可能。友人、親戚、各種専門職がおこなうことも可能。
- 家族や夫の付き添いがなかったり、あっても不安だったり、準備不足であったり、専門家との関係が希薄であったり、言葉の壁がある場合などに、ドゥーラの役割と効果が増す。

医師・助産師・ドゥーラ(1)

- 医師:

- 病気やけが(相手の弱いところ・悪いところ)を見つけて直す仕事。[検査・薬の処方・手術]

- 助産師・・・一言で言うと「女性の味方」

- 女性の産み育てる力(相手の良いところ・強み)を支え伸ばす仕事。[寄り添う・指導・見守り]

妊産婦にとってどちらも大事。

日本ではこの役割分担が明確。

さらに、日本の助産師は看護師でもあることも特徴。

医師・助産師・ドゥーラ(2)

- **ドゥーラ: 本来の「助産師」にとっても近い**
 - 母親に備わっている力、良いところを支える
 - 有り様 (Being) > 知識・技術・行動 (Doing)
 - 自ら母親の見本 (役割モデル) になる
 - 手間と時間をかけて相手に尽くす
 - 役に立つ情報を伝える
 - 母親の人間関係を豊かにする (母親と赤ちゃん・家族・専門職・社会の人々)

ドゥーラと助産師との違い: 分娩介助をするか・専門的な母乳育児支援をするか、医療的な行為をするか、国家免許がある専門職かどうか、職業としての歴史の長さだけ。

助産師にとっての「ドゥーラ」

役割が似ているから・・・

- 助産師は本来、ドゥーラサポートのプロ。
- 出産の医療化⇒現代の助産師は行為も態度も医療寄りになりやすく、本来の助産師の特徴が失われつつある。ドゥーラに学ぶことは大きい。
- 助産師とドゥーラが生かし合う＝ケア効果倍増で仲間も増える。しかし、なわばり意識が生じると……。ドゥーラのストレスNo.1は専門職から信頼してもらえないこと (Lanz, 2005)。

ドゥーラは助産師の応援団であり理解者。脅威でない。

新参者であるドゥーラを温かく迎え協働してほしい。